

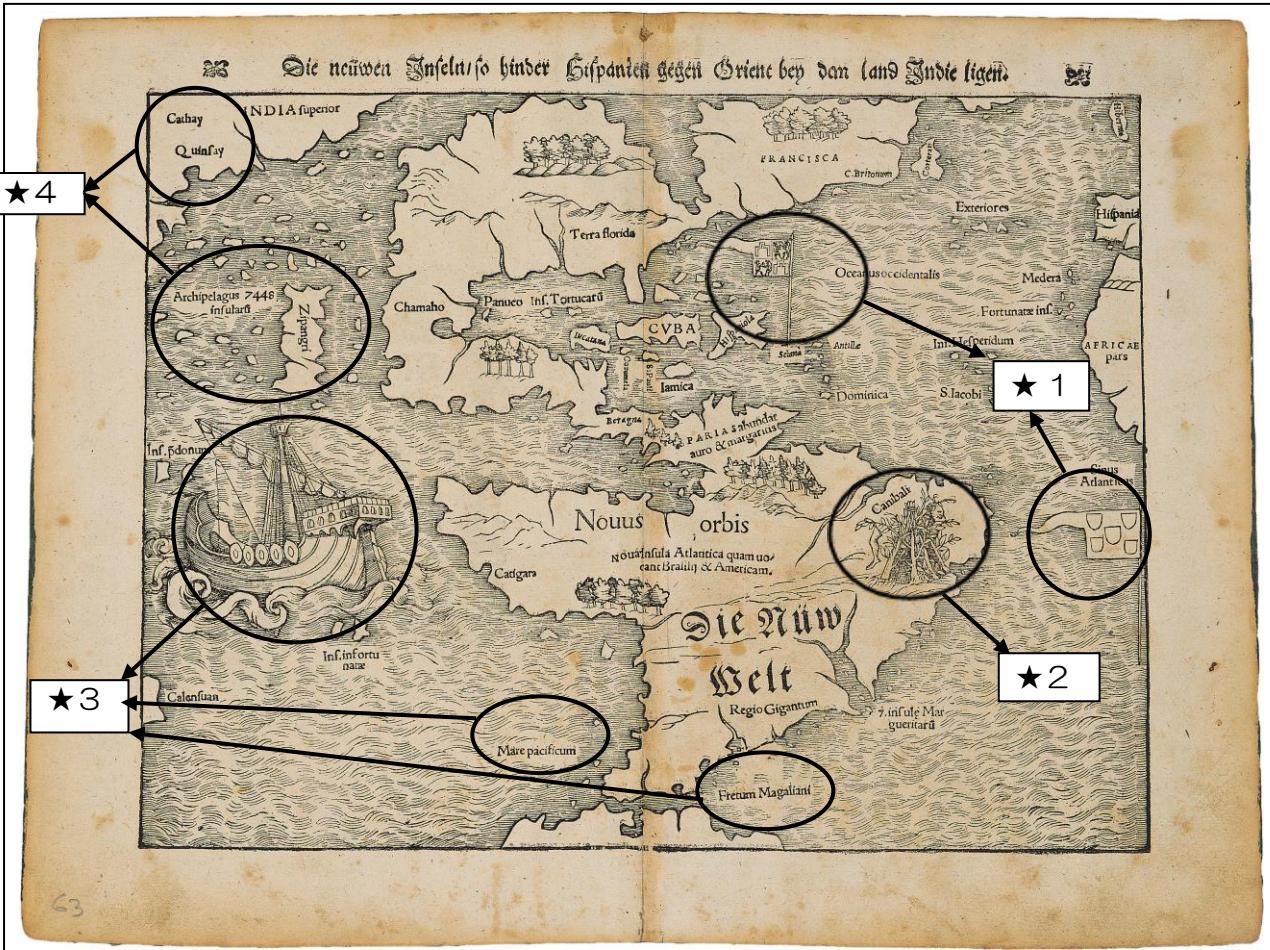
授業で使える当食官所蔵地図

No. 53 『(仮) 16世紀最初期のアメリカ大陸木版地図』

作成年：不明

サイズ：42×31cm

作 者：不明



【解説】

アメリゴ・ヴェスプッチの南アメリカ大陸探検により、アジアとは別の大陸があることが明らかになったのち、1507年、ヴァルトゼーミュラーが出版した『世界地理入門』で「アメリカ」という記載が初めて用いられたようである。地図中（南アメリカ大陸）にも「Americam」という表記があり、アメリカという名称が定着していたことが読み取れる。また、大西洋と太平洋を分断する独立した大陸としてアメリカが描かれているが、太平洋はかなり小さく認識されていたことが「Zipangri」や「Cathay」（★4）との位置関係からわかる。

★1 スペインとポルトガルの国旗

ポルトガルによるアフリカ航路（のちのインド航路）開拓に対抗し、スペイン国王イサベルの支援を受けて西回り航路でアジアを目指したコロンブスが、サンサルバドル島に到達したのが1492年である。これを機に1493年に教皇子午線が引かれ、さらに1494年にトルデシリヤス条約により、両国の勢力圏が確定した。これによりアメリカ大陸で唯一ブラジルがポルトガル領となった。経度が示されていないため、はっきりとした区別はできないものの、大西洋上にポルトガル国旗、アンティル諸島にスペイン国旗が掲げられていることから、勢力圏を確認することができる。

★2 食人（Canibali）

当時のヨーロッパの人々が、アメリカ大陸やカリブ海地域の人々に持っていたイメージを垣間見ることができる。

★3 マゼラン海峡とヴィクトリア号

南米大陸の南端部周辺に「Fretum Magaliani（マゼラン海峡）」「Mare pacificum（太平洋）」の記載があることから、マゼランの世界周航（1519～22）以後の情報が加えられたものであることがわかる。また、描かれた船はマゼラン船団のうちの1隻、ヴィクトリア号だと考えられている。

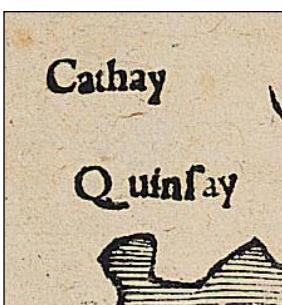


★4 ヨーロッパから見た東アジア

一般的に「Zipangri」は、マルコニポーロが『世界の記述（東方見聞録）』の中で、黄金の国として紹介した「日本」を指しているといわれる。その左側には「Archipelagus 7448 Insularū（群島：7448の島々）」という記載がみられるが、これは「ジパングの海域には7448の島がある」という『世界の記述』をもとにしたものである。また日本は、中国よりむしろ北米大陸に近い位置にある南北に長い一つの島として描かれており、当時のヨーロッパにおいて太平洋がどのように認知されていたかを感じられる。

左上部の「Cathay（カタイ）※1」「Quinsay（キンサイ）」も、同様に『世界の記述』の中で用いられている語句で、それぞれ中国と臨安※2のことを指している。

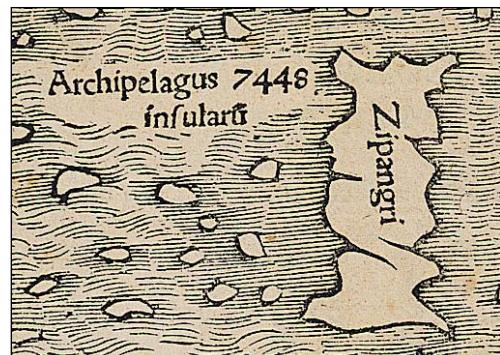
これらのことから、14世紀にマルコニポーロの『世界の記述』に記載された情報が、16世紀に入つてもなお、アジアに関する情報として用いられていたことがうかがえる。



※1 「契丹（遼）」に由来する。

『世界の記述』の中で華北を中心とする地域を指す。

※2 南宋の都であった「臨安（杭州）」を指す。



【利用の例】

○大航海時代における海外進出の原動力の一端を感じることができる。

→海外進出を行った人々が持っていた情報量の少なさや不確かさを実感し、それでもなお海外進出を目指したのはなぜかを考え、導入として活用する。

○年代の異なる他の古地図と比較して、ヨーロッパにおける環太平洋地域の情報量の経年変化を確認し、海外進出の展開について考えることができる。

→マルコニポーロが14世紀初頭に亡くなり、1世紀を経てなお、彼のもたらした情報が地図に反映されている。年代比較により、海外の情報がヨーロッパにもたらされたのち、地図という形で普及するまでの展開を考えることができ、海外進出の範囲の広がりや情報収集の状況を考えることができる。

【参考文献等】

- ・海老澤哲雄：『マルコ・ポーロ『東方見聞録』を読み解く』（世界史リブレット35）山川出版社
- ・青木康征：『海の道と東西の出会い』（世界史リブレット25）山川出版社
- ・織田武雄：『地図の歴史－世界篇』講談社現代新書
- ・ミシェル・ルケーヌ：『コロンブスー聖者か破壊者かー』（「知の再発見」双書21）創元社
- ・エドワード・ブルックニヒッティング：『世界をまどわせた地図』日経ナショナルジオグラフィック社
- ・鶴見大学図書館『第149回鶴見大学図書館貴重書展 つながる世界—古地図の中の日本—』